

令和 2 年 5 月 26 日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2019

課題番号：15K12630

研究課題名（和文）反省的实践家を育成する新しい教員研修～授業中の省察を可能にする方法論の提案～

研究課題名（英文）New Teacher Training to Foster Reflective Practitioners : A Proposal for a Method to Enable Active Reflection in the Classroom

研究代表者

七澤 朱音（NANASAWA, Akane）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：10513004

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、授業を授業後に振り返る現在の教員研修法を再検討し、授業中にスーパーバイザー（校内の人材：以下SV）の助言音声を耳で聴きながら即時的に授業改善を行う新しい研修法を提案することである。初任から熟練まで計11名の小・中学校教師（小9名、中2名）を対象とした。授業者の同僚より熟練者がSVを務める方が、学習内容と子どもの実態に合った省察を引き出せることが示唆された。また、授業者が初任の場合、SVからの情報が過多で複雑だと授業を停滞させるが、熟練・中堅では行為中の省察を意識化し自身の指導観を再認識できただけでなく、SVの介入で子どもの実態を見取るモニタリング力も向上することが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで“行為の中の省察（reflection in action）”を理論展開した論文は存在したが、授業実践でそれらを捉えようとしたものはなかった。“行為の中の省察（reflection in action）”では子ども・教授方法に関する省察が多くなり、“行為についての省察（reflection on action）”では子ども・学習内容に関する省察が多くなるといった本研究の成果は、一連の省察研究に対する新しい提案に値するだろう。SVの介入を受けながら授業実践を行った指導者は、客観的な情報を受け取りながら即時的な修正を実施できた。この成果は、今後、初任研や10年研などにも応用可能だと考える。

研究成果の概要（英文）：This research aims to reconsider the existing method used to train teachers. Specifically, the study proposes a new training method that makes immediate on-site improvements by listening to advice given by a supervisor (staff within the school; hereafter “SV”) while the class is in session. The subjects were a total of 11 elementary and middle school teachers (9 and 2, respectively), ranged from novice to experienced. The study suggested that compared to the colleagues of the teacher in charge, experienced teachers acting as SVs demonstrate a greater ability to encourage reflection that addresses both the needs of the learning content and those of the students. Moreover, in classes taught by novice teachers, the session stagnated when information was complex. In contrast, mid-level and experienced teachers benefited by conscientiously reflecting on their actions during class and reconfirming their views. In addition, they demonstrated an improved ability to monitor the students.

研究分野：体育科教育学

キーワード：校内研修 意思決定 反省的授業実践 リアルタイム介入

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国では、授業を検討し合う自律的な教師文化が存在し、その有効性が多くの研究者から指摘され評価されてきた(中田, 2010)。自主的に研修を企画し、互いの力量を磨き上げる教師も多い中で、初任者研修、10年研修などの必ず参加しなければならない悉皆研修も存在する。他にも、県や市から研究指定を受けている学校であれば、継続的な校内研修と公開研修も必要であり、授業を外部に公表する責任もつきまとう。どの教師も、目の前の児童・生徒たちに提供する教育実践の質を高めようと願い研修を企画・実践している。しかし、学校外で行われる研修が増えて出張がかさんでしまえば、本来最も時間を費やし、心を向けなければならない児童・生徒の教育に向かう余裕がなくなってしまうのではないだろうか。

本研究では、方法論が固定化し、研究主任や学年主任、外部(指導主事等)のスーパーバイザー(以下SV)が授業者を事後に指導(ティーチング)するこれまでの形式を再検討する。そして、自らの力量を高めたいと考える教師達が、校内の力量のある教師と協働し、日頃指導に当たっている子どもたちと共に日々の授業の中で実施可能な校内研究の実現を目指す。SVが授業中リアルタイムに働きかけ、“いまここ”で指導者の力を引き出し(コーチング)、指導者とSVが効果的に良い授業を創っていく研修法を提案する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、授業を授業後に振り返る現在の教員研修の方策を再検討し、授業中にSVの助言を取り入れながらリアルタイムに授業改善を行っていく新しい研修方法を提案することであった。この方法を通して、日々の授業の中で校内の教員同士が協働しながら互いの力量形成を図っていくことを目指した。

3. 研究の方法

授業後に授業のビデオ記録を再生して、授業者に観察させながらインタビュー形式でそれぞれの思考や判断を想起させる「VTR再生法(stimulated recall method)」では、データの記録自体に忘却と合理化のバイアスが入ったり、未知の不確定な状況で行われる選択や判断の思考を反映しないという限界がある(佐藤ら, 1991)。本研究では、アメフトのスポッターの役割をSVが果たし、授業中の授業者の省察を引き出すことにより、先の限界に挑戦する研修が可能になると考えた。2015年・2016年(前半)の実践では授業者と第一SV(体育科教育学の専門家)の二者で、2016年(後半)・2017年・2019年の実践では授業者と第一SVと第二SV(校内の熟練者や同僚)の三者で校内研修を実施した。授業者に対してSVが行う助言は、三名が装着したヘッドセットを用いて行った音声情報(発話内容)とした(製品:DX300シリーズ / ベース・ステーションMB300(株)スタジオイクイPMENT製)。アメフトのスポッターからコーチに届く指示は、プレイヤーが装着したヘルメットに附属しているヘッドフォンを通してプレイヤーに一方向的に届けられる(プレイヤーからコーチにフィードバックすることは不可)。しかし、本研究ではリアルタイムかつ双方向のやりとりが要となるため、それを可能にするために「(株)スタ



図1 音声データ収集システム

図2 第二SVと指導者が実際に研修を行っている様子

ジオイクイPMENT」に依頼し特別に新システムを構築した。また、それらを音声データとして収集するために、ヘッドフォンを i-pod と接続させた録音セットも発注し新しく製作した（図1）。実際に使用している様子を示した（図2）。

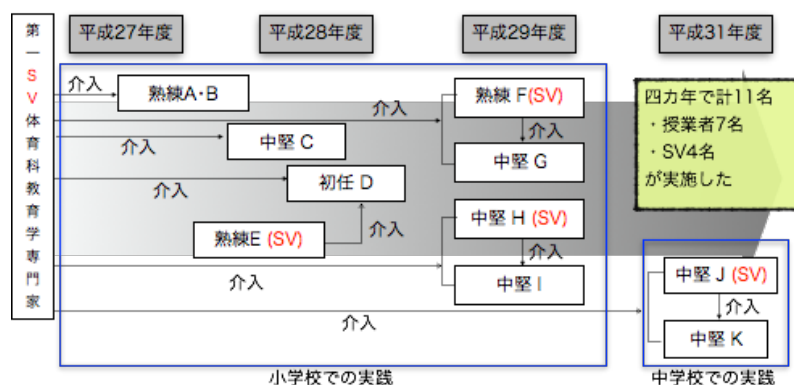


図3 本研究の全体像

研究の全体像は、図3に示すとおりであった。第一次実践は教師Aで、A小学校第1学年の「体づくり運動」（7月介入なし、12月介入あり）、第二次実践は教師Bで、B小学校第2学年の「表現運動」（9月単元前半介入なし、後半介入あり）であった。第三次実践は教師Cで、C小学校第6学年A組・B組の「器械運動（跳び箱運動）」（7月13日、授業中の介入なし）と、同学年同組の「ボール運動（ベースボール型）」（8月31日・9月9日・14日・30日、単元後半授業中の介入あり）であった。第四次実践から、本研究の目的であった指導者（教師D）・第一SV（体育科教育学の専門家）・第二SV（指導者と同じ学校に所属する教師E）の三者による研修を開始した。授業は、D小学校第5学年C組の「ボール運動（バスケットボール）」（1月18日～、全て介入あり）であった。第五次実践は、教師F・G・H・Iを対象とした。授業は、F小学校第二学年・第四学年の各1クラス計2クラスで「表現運動」（7月14日）であった。第二学年の指導者（教師G）は教職5年（表現運動は初の担任）でSV（教師F）は教職歴20年の研究主任、また第四学年の指導者（教師I）は教職8年（体育主任で表現運動の研究歴有りの担任）でSV（教師H）は同学年の同僚教師（教職8年）であった。第六次実践は、教師J・Kを対象とした。授業は、J中学校第二学年3クラスに実施して「柔道」（6月11日、14日、17日、18日）であった。指導者（教師K教職10年目）、SV（教師J教職8年目）の中堅教師であった。なお、分析には吉崎（1988）の教師の知識領域を用いたカテゴリー化や教師行動分析、事例研究を主に用いた。

4. 研究成果

(1) 2015年度

授業中の発話分析の結果、両教師とも授業中に、技能下位児童が学習のねらいに沿った取り組みができていないかに着目することがわかった。また、教師Bは、クラス全体の勢いを察知し、状況に応じて説明を加えたりよりダイナミックな示範を行ったりしていた。第一SVの介入の際、授業の客観的実態や修正方法が耳から入ってくることで、授業者は自らの指導観を見直したり授業を即座に修正したりすることができた。しかし、過去の行動について介入されると、授業の遂行に支障が出る可能性も明らかになり、第三者がフィードバックする必要があることが示された。

(2) 2016年度

分析の結果、第三次実践における“授業後”に振り返る「VTR再生法」では、学習内容に関連した教授方法に関する省察が多かった一方で、“授業中”に語る「reflection in action記録

法」では、その時々目目の前で生起する出来事や児童の取り組み状況に関連した省察がより多く語られた。これは、“授業後”の省察では、第三者的に授業の成果を捉えながら学習内容に関わった気づき生まれるが、“授業中”の省察ではまさに今そこで起こっている事象に対する教師の思考・判断が出現するからだと考えられた。また、「reflection in action 記録法」における介入なし・ありの比較をした結果、介入ありの方がより多くの省察が生まれていたことがわかった。SV の介入が、授業改善に効果があることが明らかになった。第四次実践では、授業者による即時的な修正が可能だった事柄と不可能だった事柄が明らかになった。例えば、示範方法・場所や児童の作戦タイムにおける授業者のかかわり方は、第二 SV の介入により大きく変化した。特に第二 SV の介入により、試合状況の見取り（チームがそれぞれどこに苦戦しているか）がより明確になった。ただ、“学習内容に関わる即時的な修正”に対する対処は困難であった。第三次実践で得られた結果と類似して、学習内容といった授業の「内容的条件」に関する修正を“授業中”に行うことは大変難しいことが示唆された。

(3)2017 年度

分析の結果、第四次実践では、指導者が徐々に即時的修正をできるようになり、SV の児童の実態（ゲーム中のゲーム運び等）に関わる助言が増加していくことが明らかになった。また、①（修正可）はタイマー・得点板等のマネジメントに関するものや各下位教材の意図を児童に伝えること等だった。しかし、②（修正不可）はゲーム中に必要な技能の理解と示範（「第二 SV: どういう位置にディフェンスがいれば的確に守れているのか」という助言に対し修正できなかったこと等）が挙げられた。分析の結果、第五次実践で SV を務めた研究主任の発話数は教授方法（25）・教材内容（24）・児童（58）であったが、同学年の教師は、教授方法（1）・教材内容（0）・児童（28）であった。表現運動を熟知している研究主任は、教材内容と教授方法、児童の実態を合わせて状況判断し助言できていたが、同僚教師は児童以外の教材内容や方法に関する見取りが生まれにくいことが明らかになった。木原ら（2014）は、体育部会に所属していない教師たちでも、体育主任と体育授業を合同で指導したり、日常的に体育授業に関する対話をしたりすることにより、体育の指導法や知識を学んだと言及している。本研究の結果からも、いかに、専門的力量を持つ教師が様々な教師と連携し、共に授業改善を行っていくことが重要なかが読み取れた。

(4)2019 年度

第四次実践を再度異なる視点で分析した結果、指導者（教師 D）は SV（教師 E）の助言を受けて単元終盤に肯定的言語を多く投げかけ、授業のねらいに迫る発問もできるようになった。また、第二 SV が児童たちのゲーム様相を深く見取ってその原因や対処法を即時的に示したことにより、指導者が授業を修正できるようになったことも明らかになった。研修後に実施した検討会の分析からは、第二 SV の助言が指導者の認識レベルを超えると、授業の停滞を産む原因にもなることがわかった。第六次実践では、第二 SV と指導者の相互作用行動の差と、第二 SV が即時的修正に入る・入らない授業における両者の授業中に行われた言語的やりとりを量的・質的に分析した。結果、第二 SV の方が多くの発問を投げかけたが（平均値:SV12.5 回、指導者 2.5 回）、第二 SV の授業を観るとる観点が入れば第二 SV が不在でも指導者が質の高い発問・助言をできるこ

とが明らかになった。しかし、第二 SV がいる授業では授業のねらいに迫る試技を行っている生徒を指導者が選出できたものの、不在の授業ではできなかったことも明らかになった。

(5)まとめと展望

本研究で対象となった指導者は、日頃より SV と良好な関係を構築しており、自らの力量を向上させたいという強い意志を持っていた。そのため、SV の助言を受け入れ、授業中の改善を試みることができていた。木原ら (2014) は、授業者がメンター教諭と十分なメンタリング関係を築けたことや、メンター教諭が常に非指示的な援助を行ってきたことが、授業の省察の変容に寄与したとしている。本研究の結果からさらに言及できるのは、指導者の向上心だけでなく、SV の深い洞察力が必要であるということであろう。鈴木 (2011) が指摘するように、日本の教員文化の特質の一つである同調志向は、教師の意思決定過程において沈黙等の行動となって表れる。つまり、上司の“良かれと思って行う助言”は拘束力が強く、若手教員はそれに対して反駁できない(受け入れなければならない)学校特有の階層文化(ヒエラルキー)があるのである。そのため、SV は常に温かい洞察力を持って臨み、例え指導者が SV とは異なる指導観を持っていた場合でも、指導者に反駁できる機会を与えるとともに、それらを引き出すことさえも求められるといえよう。本研究の SV は、こういった力量を持ち得ていたが、中には SV の助言に指導者が対応できない場面も見受けられた。よって、今後この方法論を採用していく際には、SV が指導者の力量を上回る情報を与えることなく、その時々で授業の要となる助言を量・質の双方から即時的に判断し、取捨する力をもつ人物が務める必要があることも示唆された。

授業中に修正を行う本研究の方法論は、教授学的な気づきを土台として授業時間中に授業を改善する意味では有効であった。しかし、授業中と授業後の省察内容が異なることが明らかになったため、子どもに関する教授学的な力量を向上させたい際は授業中に研修を実施し、学習内容と関連させて子どもの見取り力を向上させたい際は授業後に研修を実施するなど、目的に合わせて研修のタイミングを調整する必要があると考えられる。

<注>

「reflection in action 記録法」とは、本研究の研究者が命名した方法論である。授業中に、“行為の中の省察”を語る方法論とした。

<文献>

木原成一郎ら (2014) 小学校における体育授業の力量形成を促す現職研修に関する研究. 学校教育実践学研究, 20 : 115-124.

中田正弘 (2010) 実践過程における教師の学びとリフレクション(省察)の可能性. 帝京大学教職大学院年報 : 13-18.

佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美 (1991) 教師の実践的思考様式に関する研究(1) - 熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に -. 東京大学教育学部紀要, 30 : 177-198.

鈴木雅博 (2011) 学校における組織的意思決定と教師の自律性との関係性-教師が語る言説の機能に着目して-. 日本教育行政学会年報 37 巻 : 100-117

吉崎静夫 (1988) 授業研究と教師教育(1) -教師の知識研究を媒介として-. 教育方法学研究日本教育方法学会紀要, 13 : 11-17.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 七澤朱音
2. 発表標題 反省的实践家を育成する新しい教員研修～授業中の省察を可能にする方法論の提案(3)～
3. 学会等名 日本体育学会第68回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 七澤朱音
2. 発表標題 反省的实践家を育成する新しい教員研修～授業中の省察を可能にする方法論の提案(4)～
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第37回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 七澤朱音
2. 発表標題 反省的实践家を育成する新しい教員研修（1）授業中の省察を可能にする方法論の提案
3. 学会等名 日本体育学会第67回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 七澤朱音
2. 発表標題 反省的实践家を育成する新しい教員研修（2）授業中の省察を可能にする方法論の提案
3. 学会等名 第36回日本スポーツ教育学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 七澤朱音
2. 発表標題 反省的実践家を育成する校内研修のあり方-授業の参観中に見取り語る方法論の検討-
3. 学会等名 日本体育学会第66回大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 七澤朱音
2. 発表標題 反省的実践家を育成する校内研修のあり方(2)-授業の参観中に見取り語る方法論の検討-
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第 35 回記念国際大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 七澤朱音
2. 発表標題 反省的実践家を育成する新しい教員研修 (5) 授業中の省察を可能にする方法論の提案
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 七澤朱音
2. 発表標題 反省的実践家を育成する新しい校内研修 (5) 授業中の省察を可能にする方法論の提案
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第39回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----